


 巻頭言

モラル、ゆとり、独創性

池田 克夫*



退屈が文化を作るといふ。馬車馬のように忙しくしているときは、文化というゆとりもないし、ろくなアイデアも生まれてこない。忙中閑ありともいふ。時間のあるときは案外何もせず、ぼんやりして無為の時を過ごすことが多いが、忙しいときに案外仕事以外のこともやれているのである。時間がないから、いっそう真剣に時間を使うからなのか。こんな経験を持つ人も多いのではないだろうか。それにしても、今日の社会は少し忙し過ぎるのではないか。それも、あまり生産性のないことで結構時間をとられることが多いように思われる。地方に住んでいると、月何回かの東京参りで往復の時間が余計にかかるからなおさらである。

アメリカやヨーロッパで一時期過ごした経験からは、土日を休んでも、日本以上に仕事ははかどったものである。基本的には、仕事の仕方が違うのだということであるが、例えば、ものを買うのにサイン一つですぐ小切手をきり、いちいち理由書などは書かない、1枚の郵便切手の払い出しをするのに、いちいち伝票など書かない。少なくとも、これだけで能率は2倍になっている。会計法でがんじがらめに縛られているうえに、定員削減で人手まで減らされている国立大学の研究室から見るとうらやましい限りである。ヨーロッパの都市で市電に乗っても、普通は車掌もいないし、滅多に検札もない。切符は自分で改札してそれでおしまい。ただ乗りはしようと思えばいくらでもできるが、誰もそんなことはしない。もちろん、どこにでも悪人はいるのであるが、基本的には、不正はないものだということが、社会システムの基本になっている。要は、まったく非生産的なところに余計なコストをかける必要がないのである。チェック機構がまったく不要だということにはならないが、過ぎたるは及ばざるにしかず、社会正義、社会的影響、およびトータルコストのバランスが肝要であろう。

ところで、情報処理システムの場合はどうであろうか。重要機密を扱う情報処理システムにとって、セキュリティチェックは重要な課題であるが、高度な情報処理システムの場合、セキュリティチェックはまだ完成の域には達していないし、当分完璧を期することは難しいと思われる。コンピュータウイルスが、あちこちでかなりの悪さをしている、とのニュースが多く聞かれるこの頃である。しかし、金銭を盗んだといった、本当の犯罪になっていないのが救いである。むしろ、ルスト少年と同様、社会システムの欠陥を指摘した功績のほうが、今後の社会にとっては、意義が大きいであろう。計算機は、知的好奇心を満足させるためには最高の玩具、といっっては少し言い過ぎかもしれないが、成長期にある青少年の心をとらえるものを持っていると思う。子供の頃とっくみあいの喧嘩をすることによって、手加減ということを知ってきたものが、最近の子供は、そのようなことがないので、いきなりナイフで人を刺すとか、計算機でのいたずらもそれに似ていないだろうか。彼らにとって、いたずらのできるシステムがないこと自体が問題ではなかろうか。

大学の教育用計算機システムでは、好奇心に満ちた頭の柔らかい学生と、使命感に燃えたシステム管理者との知恵比べが日常行われている。システム管理者に望みたいのは、迷惑かもしれないが、いたずらに目くじらを立てずに、ゆとりを持って共にそれを楽しみながら知恵比べをし、大いに彼らのユニークな発想とハッカー精神を養い、豊かな経験をさせてやってほしいということである。その投資に対しては、必ずや、大きな効果が表れるものと信じている。教育用計算機システムのセキュリティチェックは余り嚴重でないほうがよい。教育用の計算機システムのファイルなど、消えてしまってもどうせ大した社会的影響などないのだと、割り切ってしまうとよい。

魅力のある、文化的な高度の情報社会を発展させるためには、高いモラルと独創性を欠かせない。これらは一朝一夕にできるものではない。気持のゆとりを持って、倫理観、合理的な考え方、大きな視野、独創性を幼児期から大事に育てていかなければならない。

* 京都大学教授(工学部情報工学教室)